氏　名	山矢　和輝
学 位 の 種 類	博　士（社会工学）
学 位 記 番 号	博　甲　第　9427　号
学 位 授 与 年 月 日	令和２年３月 25 日
学位授与の要件	学位規則第４条第１項該当
審 査 研 究 科	システム情報工学研究科
学位論文題目	サービス産業における会計情報システムの活用に関する実証的研究

主　　査	筑波大学　准教授	博士（商学）	岡田　幸彦
副　　査	筑波大学　教授	博士（理学）	繆　瑩
副　　査	筑波大学　准教授	博士（経済学）	生稲　史彦
副　　査	筑波大学　准教授 （ビジネス科学研究科）	博士（商学）	中村　亮介
副　　査	筑波大学　准教授	博士（経済学）	大久保　正勝

論　文　の　要　旨

本論文は、わが国サービス産業における会計情報システム（AIS; Accounting Information System）の活用実態を明らかにするとともに、AIS をサービス産業においても有効に活用するために考慮すべき諸要因を実証的に明らかにしようとする挑戦的な研究である。第１章では、業績管理会計を想定した AIS の導入・利用にかかる充実した先行研究のレビューを行い、それらの歴史的展開と潮流を提示している。第２章では、第１章で行われた先行研究レビューを基礎として、サービス産業における AIS の有り様と活用を測り、分析し、議論する上で重要な諸概念を整理し、取り組むべき具体的な研究課題を提示している。第３章では、わが国上場サービス企業向けの質問紙調査の結果を基礎集計し、AIS のその他のシステムとの統合度と、第４章以降で取り扱う重要な概念・変数との関係を探索的に分析している。第４章では、同じ調査データを用いて、AIS の新興技術と継続的改善活動との間の関係性について分析し、その背後で起こりうる特徴的な関係を概念的に議論している。第５章では、同じ調査データを用いて、サービス産業における AIS の業績管理上の活用効果を高める因果メカニズムを議論し、実証分析し、AIS を活用する組織能力の醸成が経営上重要となることを明らかにしている。第６章では、同じ調査データを用いて、過去情報を中心とする AIS が未来の新たな状況への適応や企画・計画のためにも効果を発揮するために、AIS を活用する組織能力の醸成が非常に重要となることを実証的に明らかにしている。これらの各章における実態・実証分析および議論の結果をふまえ、終章では、サービス産業の労働生産性や財務業績を向上させるための AIS の役割、そこでのフィードバック機能だけでなくフィードフォワード機能の重要性、そして業種等の固有の関係や効果の可能性を総合的に検討している。

審　査　の　要　旨

【批評】

本論文は、先行研究においても実務的にも指摘され続けてきた、AIS が必ずしも経営上有効に導入・活用されてこなかった社会課題に焦点をあて、管理会計的アプローチによる課題解決を目指す際の科学的根拠を提示しようとする挑戦的な研究である。特に、充実した先行研究レビューとわが国サービス産業ならではの特徴をふまえ、丁寧に質問票を作成し、充分な調査データを入手し、きめ細やかな実態整理と実証分析を行っている点で高く評価できる。また、歴史的に先行研究が伝統的な業績管理会計のフィードバック機能に焦点をあてるとともに、AIS を活用する組織能力を軽視する傾向にあったのに対し、本論文は未来情報も扱う管理会計ならではのフィードフォワード機能をも考慮し、伝統的なフィードバック機能においてもフィードフォワード機能においても AIS を活用する組織能力が経営上重要となることを実証的に明らかにした点で、理論的に非常に高く評価できる。加えて、調査データの充実した実態整理と実証分析を通してわが国サービス産業全体に広く指摘できる課題と解決策の道筋を示すとともに、業種等によって留意すべき懸念点も検討している点で、大きな実務的貢献も果たしている。

しかしながら、本論文には以下のような課題が残されている。まず指摘すべきは、海外と比較してわが国サービス産業は法規制としても商慣習としても特殊であり、本論文で明らかになった知見や科学的根拠が海外のサービス産業においても再現性が高く、有効であるのかの保証がなされていない点である。また、本論文の立場が伝統的管理会計を基礎としているがゆえに、AIS の導入・活用の焦点が財務的視点に集中している点である。企業経営は、財務的視点だけでなく、顧客の視点、内部プロセスの視点、学習・成長や変革の視点等も重要となることが知られており、それらをバランスよく測定し、管理する技術もすでに提示されていることを忘れてはならない。さらに、実態整理と実証分析を行った全ての章の調査データが同一のアンケート調査であり、わが国のこの時期ならではの特徴が色濃く反映されている可能性も、注意を要する。

以上の３つの課題が残されているものの、本論文が行った文献整理、調査設計、実態・実証分析は時間をかけた誠実なものであり、他に見られない大変貴重なデータを入手できており、AIS を活用する組織能力の順機能と逆機能に注目した実証的研究が今後発展する土台となる研究として高く評価できる。そのため、本論文を博士（社会工学）に相応しい内容だと判断する。

【最終試験の結果】

令和２年２月１０日、システム情報工学研究科において、学位論文審査委員の全員出席のもと、著者に論文について説明を求め、関連事項につき質疑応答を行った。その結果、学位論文審査委員全員によって、合格と判定された。

【結論】

上記の学位論文審査ならびに最終試験の結果に基づき、著者は博士（社会工学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。